平成29年12月1日発行

かまにし

第66号

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

未来に羽ばたくピアニスト
五味田（ごみた）　恵理子（えりこ）さん

新進ピアニストとして、国内はもとよりヨーロッパでも活躍されている五味田恵理子さんをご紹介します。

五味田さんは昭和六二（一九八七）年、大田区の生まれ。地元の小学校を出て香蘭女学校中等科、東京芸術大学音楽学部附属高校・同大学を経て大学院修士課程を修了、更にドイツ国立ミュンヘン音楽演劇大学マイスター国家演奏家資格ソリスト課程を、いずれも優秀な成績で終えられています。

これまでに河野京子、野原みどり、深澤亮子、植田克己、海老彰子、ミヒャエル・シェーファーの各氏に師事。日本モーツァルト音楽コンクール第二位、野島稔・よこすかピアノコンクール第三位、モーツァルト国際コンクールディプロム等、数々の賞を取得されています。

現在は東京芸術大学附属音楽高校非常勤講師として後輩の育成に務めるとともに、ピアノの個人レッスン、コンサートの開催と忙しい日々を過ごされています。去る五月には、アプリコにて「お昼のピアノコンサート」を開催され、地元出身のピアニストということで大きな反響がありました。

お母様が趣味でピアノを習っておられて、ご自身も幼稚園の頃からピアニストになる夢を抱いたそうです。ドイツに行って感じたことは、ヨーロッパではクラシック音楽・オペラ等が日常生活に根ざしていて、ちょっとおしゃれをして、コンサートに気軽に出かけるのが当たり前なのに、日本ではクラシックに対する認識が低い、なんとかクラシック音楽をもっと広め、一般化したいものだと語っておられました。

毎年夏には、ご自身の〝音楽のふるさと〟ドイツに足を運び、友人・知人に会ってリフレッシュされているそうです。

クラシック音楽を通して、日本とヨーロッパの架け橋になりたいとの強い思いで、見知らぬドイツに留学した五味田さん。言葉の壁や文化の違いなどで苦労をかさねてこられたにもかかわらず、取材中笑顔を絶やさず、柔らかな物腰のなかにも芯の強さを秘めた五味田さんは、とても素敵な女性でした。

ピアニストとしての夢とともに結婚もしたいとおっしゃっていました。素晴らしい伴侶を得て、更なるご発展を遂げられますよう心から祈っております。

（取材　近藤・佐藤委員）

ご存知ですか？
蒲田国際フェスティバル　2017

去る一〇月八日（日）、日本工学院蒲田キャンパスにおいて、「蒲田国際フェスティバル２０１７」が開催されました。

そのテーマは五つ
「世界の音楽を楽しもう」
「世界の文化に触れてみよう」
「世界の踊りで盛りあがろう」
「世界の料理を味わおう」
「世界の人と友達になろう」
でした。

写真Ａ

メインステージでは一一時から開会式（写真Ａ）、その後サンバ、ボサノバ、チアダンス（写真Ｂ）、殺陣、アフリカ音楽（写真Ｃ）、ネパール音楽、ブラジル吹奏楽……等々、ふだん目や耳にしない踊りや歌を四時近くまで楽しみました。珍しい飴細工や南京玉すだれの見学も。

写真Ｂ

一方、飲食ブースとキッチンカーでは、韓国のチヂミ、ネパール料理のカレーとナン、アメリカのハンバーガーとロングポテト、トルコのケバブ、ハワイのかき氷など、日本からは広島の牡蠣も登場していました。

他にも、工学院の学生さん作成のポストカードの販売、輪投げ、ミニバスケットボール、矢口消防署展示コーナーでの写真撮影など、盛り沢山の催しがありました。

ゆるキャラの「ゆりーと」、矢口消防署の「ヤッピー」、日本工学院専門学校公式キャラクター「かまトゥ」の三体が子供たちと握手したり、写真を撮ったりして忙しく会場内を回っていました。来場者は約三〇〇〇人とのことでした。

大田区には一二〇か国余り、約二万二〇〇〇人の外国人が住んでいて、蒲田周辺がいちばん多いといわれます。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックには更に多くの方が訪れることでしょう。今後、この「蒲田国際フェスティバル」の開催によって、国際交流が一層深まることを期待したいと思います。

写真Ｃ

来年度は、会場を蒲田駅西口広場まで拡大し、東急プラザ蒲田や商店街の協力を得て、更に盛り上げていくそうです。

（取材　永山・瀬川・髙橋委員）

「かまにし17」をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七-一二-七
電話　3732-4785

蒲田西特別出張所管内

人口	男	32，313人
	女	29，814人
	計	62，127人
世帯		35，154世帯

平成29年11月1日現在

多摩川両岸物語①

～恩恵と軋轢をもたらすもの～

第一回　多摩川と大田区

多摩川の概要

私たちが日々生活を営み、あるいは仕事場としている大田区。その大田区の南の端を多摩川は悠々と流れている。多摩川は山梨県甲州市塩山の笠取山（一九五三ｍ）南傾斜面下の水干（みずひ）に源流を発し、延々一三八㎞を流れ下って、羽田で東京湾に注ぐ。

水源のある笠取山は山梨県と埼玉県にまたがって二つの頂を持ち、多摩川・富士川・荒川の分水嶺となっている。そのため山頂の南側に降る雨は多摩川となり、西側は笛吹川、その下流は富士川となって駿河湾に注ぎ、北側は荒川の源流となっている。

全国にある一〇九の一級河川の中で、長さ一三八㎞は二五位、流域面積一二四〇平方㎞は五四位、流域内の市町村は三〇（山梨二・東京二六・神奈川一）と決して特筆できるような川とはいえないが、流域内人口はなんと五〇〇万人を数え、特に中・下流域は典型的な都市河川だといえる。

鶴川街道に架かる多摩川原橋から河口までの約三〇㎞区間では、多摩川が東京都（調布市・狛江市・世田谷区・大田区）と神奈川県（川崎市）の行政上の都県境となっている。世田谷区との境から羽田の河口までの大田区内の流路は約一七㎞である。多摩川の土手を歩いていると一㎞ごとに設置されている海からの距離標に気づくが、羽田空港の埋め立てなどがあり、実際の河口は数㎞先に伸びている。そのせいか面白いことに羽田空港の多摩川沿岸堤防上には河口からのマイナス距離標がある。

江戸時代の文書には玉川と記載されているものも多く、二子玉川のように、今でもこの字を使った地名は多い。大田区矢口には多摩川小学校、対岸の川崎市には玉川（ぎょくせん）小学校があって紛らわしい。かつては多摩川の下流部は六郷川と呼ばれたが、今ではほとんど使われていないようだ。

大田区民にとっての多摩川

現在の私たちは、水道の蛇口さえひねれば簡単に水が得られるという便利な生活を行っている。区内の農業従事者は極めて少なく、農業用水の心配をする人もいない。また、普段は多摩川の氾濫・洪水の不安などこれっぽっちも感じることなく、川のある風景に親しんでいる。大田区民にとって、多摩川は河川敷でのスポーツを楽しんだり、見晴らしの良い土手上の遊歩道を散歩してリフレッシュする憩いの場という位置づけなのではないだろうか。毎年八月一五日の終戦の日に六郷土手で行われている花火大会を思い起こす人も多いかもしれない。

しかし数十年前までは、この地域に住む人々は多摩川がもたらす恩恵と災害とに直接そして真正面に向かい合いながら生きてきた。それは当時の人々の生活が水に依存する農業中心だったからであり、また近代堤防のない氾濫原地域が生活の場であったからである。そのため、この川は長い間流域に住む人々の真剣な水とのかかわり、生き様の歴史を見続けてきたのだ。

これから何回かにわたって、近世以降の多摩川が流域の人々にもたらした恩恵と軋轢を、多摩川流域文化圏の生活史として書いていきたい。全体を通してのキーワードは「ライバルと多摩川流域共同体」とでもいえようか。

多摩川のことを述べるのに六郷用水から書き出すのは、近世以降の多摩川流域史は六郷用水なしでは考えられないからである。今回はまず5W1Hで六郷用水の基本的理解を簡単に確認しておきたい。

六郷用水の5W1H

WHO（誰が？）徳川家康は一五九〇（天正一八）年、小田原の北条氏を滅亡させた功績により、豊臣秀吉によって関東八か国（関八州）を与えられ、三河から江戸に移ってきた。本当は家康の力を侮れないと不安を感じた秀吉が、家康を遠国の関東に追いやるように転封させたのだといわれている。その時から家康は将来を見据えて領地の基盤を固めるために、江戸の城下町の整備と、未開発の領内の水田開発に取りかかった。その一つが六郷領（現在の大森・蒲田・糀谷・羽田・六郷・矢口・下丸子など大田区の低地平野部一帯）を灌漑する六郷用水の開削だった。

その開削の指揮を執ったのは、家康に従ってやってきた家臣で駿河出身の小泉次大夫である。彼はその恩賞として下袋村（現在の北糀谷）に領地を得ている。また開削から一〇〇年も経つと取水口の老化や新たな新田開発により慢性的な水不足をきたすようになった。そこで一七二六（享保一一）年から翌年にかけて川崎宿の名主、田中丘隅（休隅）が大改修工事を行った。田中丘隅は多摩川渡船のところでも触れるので名前を覚えておいてほしい。小泉次大夫と田中丘隅の頭文字をとった顕彰碑「泉田二君の碑」が小泉次大夫の墓がある川崎の妙遠寺に建っている。

WHEN（いつ？）六郷用水は、江戸幕府が開かれる六年前の一五九七（慶長二）年から測量が開始され二年後から本格的開削工事に入った。一六〇九（慶長一四）年に幹線本流が完成、一六一一年に末端枝流まで完成した。二〇一一年に完成四〇〇年の節目の年を迎え、様々な記念行事が行われた。

WHAT（何を？）小泉次大夫は多摩川を挟んで両側に二つの灌漑用水を開削した。六郷用水は左岸の六郷領三五か村を灌漑し、二ケ領用水は右側の稲毛領と川崎領の六〇か村を灌漑した。この二つの用水は同じ時期に交替で工事が進められたので「双子の用水」と呼ばれている。また、六郷用水はのちに世田谷領の灌漑も公認されたので、全体を合わせて「四ケ領用水」と総称されることもある。

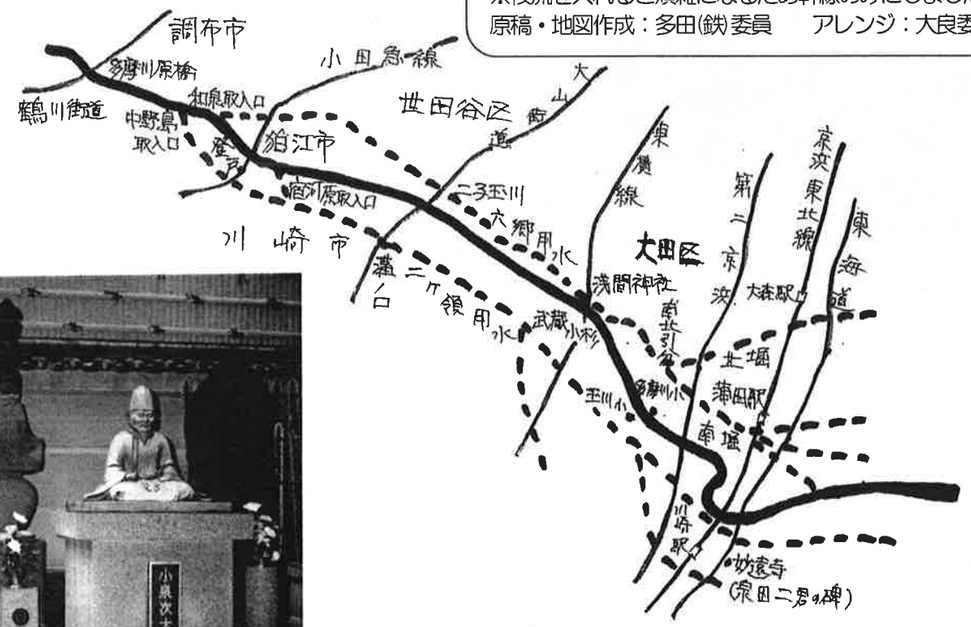
WHY（なぜ？）六郷領の低地には多摩川・呑川・内川などの自然河川はあるが、近くを流れる多摩川から大量に水をくみ上げることは当時の技術では難しく、海に近いため塩分が混じってしまう。また、呑川などの小河川は水量が安定せず、大規模な水田は作れない。広い平地があり江戸にも近い六郷領は、灌漑用水を引いて水田を開発し、江戸の財政基盤を確立するのに必要な土地だった。

WHERE（どこに？）下沼部村（現在の田園調布一丁目）の浅間神社辺りは多摩川に近接しているが、ここから取水しても六郷領の村々と標高差が少ないため隅々の村に大量の水を送り届ける力がない。そこで浅間神社から一〇㎞上流の狛江村和泉で取水、国分寺崖線に沿って南下させるようにして、途中で野川や仙川などの自然河川や崖線からの湧水を加え領村から六郷領に入ってきた。矢口の南北引き分け（現在の千鳥三丁目）で分流し、一方は北堀となって池上・新井宿・大森方面へと向かい、もう一方は南堀となって蒲田・六郷・糀谷・羽田方面へと向かった。さらにその先でも分流し各村々の水田を網の目のように潤した。

HOW（どうやって？）工事は本流末端に近い道塚村から始まり、上流へと向かった。また、対岸の二ケ領用水と三か月ずつ交替で地域の農民が参加して掘り進めていった。途中、嶺の切通など難工事もあって完成までに一四年を要した。

（取材　多田㈱委員）

●現在の多摩川の流れ（太い実線）
●六郷用水の幹線（多摩川より北側の点線）
●二ヶ領用水の幹線（多摩川より南側の点線）
※枝流を入れると煩雑になるため幹線のみにしました。
原稿・地図作成：多田㈱委員　　アレンジ：大良委員



小泉次大夫像